

北方四島の自然  
資料集

平成10年12月

財団法人 自然保護助成基金編

# 北方四島の自然

## 1. はじめに

北方四島は日本固有の領土であるが、太平洋戦争終結時に、ソ連が占領することとなって、現在に至るまでその状態が継続し、四島の返還は日露間の外交問題として交渉が行われて来た。平成10年、橋本首相とエリツィン大統領との間で、西暦2千年までに国境線を確定することが合意され、さらに小渕首相と同大統領間で四島の「日露共同経済活動」が合意されるに至って、にわかに四島の自然保護の問題も、クローズアップせざるをえない事態となって来た。

北方四島の自然は、荒海に囲まれた環境と、気象条件の酷しさ、それに軍事上の重要性によって、戦前から開発は抑えられ、戦後ソ連占領下にあっても同様に、僅かな開発がなされたのみであり、自然保護上の観点からは、「原始の自然が奇蹟的に残された亜寒帯の火山性島嶼」という、世界でも稀に見る貴重な地域となっている。いまこの自然を手つかずに後世に遺すことは、我々に課された使命でもある。しかしながら、戦後50余年の間、政治的理由から、この地に日本人の立ち入りは酷しく制限されて来たこともあって、自然に関する情報は乏しく、資料の入手も困難であり、例えあっても断片的なものに限られていた。このためその「自然の素晴らしさ」を具体的に語る術を持たないのが現状である。

そこで「経済共同活動」が活発化して、自然に悪影響を及ぼさないうちに、いま入手出来る、自然に関する新旧のデータをまとめ、資料集として保護に関心ある方面に配付することを企画した。早急に取りまとめたために、十分なものとはいえないが、とりあえずの目的にかなう資料として役立てば幸いである。またこれを契機として、さらに詳細なガイドブックが作成されることを期待したい。

本資料集作成に際し、貴重な資料をご提供頂き、また有益なご助言を賜った次の方々に厚く御礼申し上げる次第であります。（敬称略）

地理関係： 小泉武榮（東京学芸大教授）、俵 浩三（北海道自然保護協会会長）

植物関係： 大場達之（当基金理事）、俵 浩三

動物関係： 藤巻裕蔵（帯広畜産大教授）、和田一雄（元東京農工大教授）

参考資料：（本文に明記したものを除く）

国立天文台編 理科年表 1999

気象庁編 日本火山総覧（第2版）、1996年

V. A. 軒エフ 著 南千島の鳥類（藤巻裕蔵訳）、1979年

北海道 北方領土のあらまし、1989年

## 2. 地理

カムチャッカ半島南部と北海道本島東部の間に、太平洋とオホーツク海を分けて弧（千島弧と称する）を描き、約千キロメートルにわたって連なる千島列島は、大小数十の島々から成り、大部分が千島火山帯に属する火山島である。これを通常、北・中・南の三つに分ち、シュムシュ、パラムシル、アライトの三島を北千島、オンネコタン島からウルップ島までを中千島、北方四島すなわち択捉島、国後島、色丹島、および歯舞諸島を南千島と呼ぶ。四島の内、色丹・歯舞は、正確には千島火山帯とは別の、根室半島の延長線上にある島であり、火山はない。

島の面積はそれぞれ次のとおり。

択捉島	3,184 km <sup>2</sup>	(本土を除き我が国第1位の島、佐渡の3.7倍、群馬県の半分)
国後島	1,499	( " 2 " 、沖縄本島の1.25倍)
色丹島	253	( " 13 " 、屋久島の半分、徳之島と同じ)
歯舞諸島	100	(水晶島、秋勇留島、勇留島、志発島、ハルカリモシリ島、多楽島、海馬島、カプト島 合計)

国後島の南端から択捉島の北端までの距離は約340km、横浜・仙台間の距離であり、択捉島だけでも200km（ほぼ新潟・富山間）、国後島でも沖縄本島よりも長い。四島の面積合計は約5千km<sup>2</sup>で、福岡県に匹敵する。この地域に僅か1万7千人程度の人口（終戦時も現在もほぼ同じ）しか住んでおらず、しかも居住地は四島のごく一部分の海岸線の集落に集中しており、大部分は道路も構築物も一切ない自然状態に置かれたままである。

各島の海岸線は色丹島を除き、屈曲が少なく、大部分は断崖と暗礁が連続して、港湾となる湾岸に乏しい。色丹島の南岸のみは変化に富んだりアス式海岸になっている。国後・択捉は両島とも細長く火山が連なり、平地が少なく、河川も急で短い。火山は国後の爺爺岳の1822mを最高峰として、多くの活火山・休火山が聳える。とくに択捉では千メートル級の山が10峰を超えており、太平洋戦争後に爆発した活火山も複数峰あり、活発な火山活動が見られる。岩質は主に安山岩と玄武岩である。高峰のリストは下記のとおり。なお色丹島には高峰はなく、斜古丹山413mが最高地点となる。また歯舞諸島はいずれも海食台地状の島で、海拔僅か数十メートル以下の平坦な島々である。

(国後島)

爺爺岳 (チャチャ)	1,822 m(島の最北部にあり円錐形の複式火山、外輪山1486m)
ルルイ岳	1,486 (島の北端、爺爺岳の北側、オホーツクに面す)
羅白山	888 (中部、太平洋側にあり硫黄を産出)

(択捉島)

神威岳	1,322 m(島の最北端の山)
-----	------------------

ラツキベツ岳	1, 206 m(神威岳の東に連なり双耳峰をなす)
茂世路岳 (モヨロ)	1, 124 (北端、神威岳の南、三峰に分れ東最高峰は円錐形)
散布山 (チリップ)	1, 587 (中部、オホーツクに半島状に突出、北散布と双耳)
指白山 (サシウス)	1, 125 (中部、太平洋側、円錐形、時に噴煙を上げる)
小田萌山 (オダモイ)	1, 208 (指白の西、海岸に沿って連峰をなす、火山湖あり)
焼山	1, 158 (小田萌の西に連なる、近年噴火、火山湖を抱く)
恩根登山	1, 426 (中南部両岸の中央、単冠、西単冠と連山をなす)
西単冠山 (ヒトカップ)	1, 566 (散布山に次ぐ高峰)
阿登佐岳	1, 206 (南部、オホーツクに突出、秀麗な複式円錐火山)
ベルタルベ山	1, 221 (島南端の独立峰)

火山に付き物の温泉は、両島共多く、とくに国後では各所で利用されて来た。

湖沼は、大きな湖はないが、島嶼にしては数はかなり多い。カルデラ湖としては、国後の一菱内湖 (イチビシナイ、濁った温水が湧出)、択捉のトウロ沼、得茂別湖 (ウルモンベツ) があり、択捉の茂世路岳連山の溶岩流が薬取川を堰き止めて出来た薬取沼や、年萌湖・東沸湖・ニキシヨロ湖は堰止湖、また海岸沿いに、北方要素の海跡湖、湿原の沼が多く点在し、国後の東西ビロク湖、択捉のレブン沼、内保沼などがある。なお湖沼ではないが、択捉南部オホーツク側の萌消湾 (モイケシ) は、海中に沈下したカルデラ湾として大規模 (直径6x8km, 能取湖よりやや小) なものであり、20kmにもわたって海から 3,4百メートルの火口壁が屹立する様は、エーゲ海サントリニ島にも比すべき偉観といえよう。

河川については、国後・択捉とも細長い火山島であるため、大きな川はなく、国後では北部の音根別川、択捉では北部の薬取川 (28km, シベトロ)、中部の沙那川、留別川、南部の内保川などがやや川らしい川だといわれる。また湿原は、国後の中部古釜布付近、北端の東西ビロク湖周辺、択捉の南部内保沼周辺、北部の別飛付近、色丹のノトロ川流域などに見られるが、規模は大きくない。歯舞諸島の志発島・水晶島・多楽島にある湿原は、根室沖ユルリ島と同様に海霧により涵養され出来たものと考えられる。

気候は、太平洋側を南下する親潮と、日本海を経てオホーツク海を北上する黒潮が接するため海霧が 3-6月に多く発生し、とくに6, 7月はひどく、日照時間が少ない。年平均気温は4, 5度程度で根室と大差ない。降水量は月 100ミリ前後で、太平洋はやや少ない。降雪は11月から 5月上旬までであるが、強風のため山間・窪地を除いて積雪は多くない。流水は 2月初めから 4月20日頃まで見られる。4月下旬から雪解けとなり、山間部を除き 5月下旬には雪はなくなる。花は 7月から 8月にかけて一斉に咲く。

### 3. 植物

北方四島の植物については、まず俵 浩三博士にご提供頂いた「千島森林誌」(帯広営林局、昭和34年)の抜粋により森林植物を中心に概観する。

南千島は植物学的には亜寒帯・亜高山常緑針葉樹林帯(TATEWAKIA)に属し、ウルップ島との間の宮部ラインにより中千島以北の植生と一線を画している。国後の南部と中北部太平洋側では広葉樹林と針広混交林が見られ、国後の他の地域や択捉の大部分は針葉樹林で、国後の中北部、択捉南部、それに色丹ではトドマツ・エゾマツ、択捉中部はカラマツ、そして北部ではダケカンバ林が優勢となる。ハイマツは国後・エトロフに分布するが、色丹にはなく、日本本土にはないグイマツが色丹と択捉の限られた地域に分布する。森林のない低地ではチシマザサが優勢である。なお歯舞諸島には森林はない。

森林の被覆率は択捉が80%、国後が61%、色丹が23%とロシア側から報告されている。また森林の蓄積量は戦前、択捉が5.4百万立米、国後が7.3百万立米、色丹が0.3百万立米、計13百万立米との統計があり、択捉・国後ともその50%が原生林であったという。

#### ○ 千島森林誌に掲載された木本目録 (館脇 操博士による)

(イチイ科) イチイ

(マツ科) トドマツ、アカエゾマツ (国)、エゾマツ、グイマツ (色・択)、ハイマツ

(ヒノキ科) ミヤマハイビャクシン (択・国)

(ヤマモモ科) ヤチャナギ (国) ・ (クルミ科) オニグルミ (国)

(ヤナギ科) ヤマナラシ、オオバヤナギ (国)、ミネヤナギ、キツネヤナギ (択)、

バッコヤナギ、マルバノバッコヤナギ、ナガバヤナギ、チシマヤナギ、

(カバノキ科) シラカンバ、ダケカンバ、ケヤマハンノキ、ミヤマハンノキ

(ブナ科) ミズナラ、モンゴリナラ、カシワ (国)

(ニレ科) ハルニレ (国)、オヒョウ (国) ・ (クワ科) ヤماغワ (国)

(モクレン科) ホオノキ、チョウセンゴミシ

(マタタビ科) サルナシ、ミヤママタタビ

(ユキノシタ科) ノリウツギ、エゾスグリ、トガスグリ (国)

(バラ科) ホザキシモツケ、エゾシモツケ、マルバシモツケ、エゾマルバシモツケ、

ホザキナナカマド (国)、タカネナナカマド、エゾナナカマド、チシマナナカマド、

アズキナシ、エゾノコリンゴ、ヒメゴヨウイチゴ (国)、エゾイチゴ、キンロバイ、

チングルマ、ハマナス、オオタカネバラ (国)、カラフトバラ、ミヤマザクラ、

エゾヤマザクラ、チシマザクラ、シウリ

(マメ科) イヌエンジュ、エゾヤマハギ

(ミカン科) ヒロハノキハダ、ツルシキミ ・ (ユズリハ科) エゾユズリハ

- (ウルシ科) ヤマウルシ、ツタウルシ  
(カエデ科) オガラバナ、イタヤカエデ  
(モチノキ科) ハイイヌツゲ、アカミノイヌツゲ、ツルツゲ  
(ニシキギ科) ツルウメモドキ、コマユミ、マユミ、エゾツリバナ、ヒロハツリバナ、ムラサキツリバナ ・ (ブドウ科) ヤマブドウ  
(ウコギ科) タラノキ、ハリギリ ・ (イワウメ科) イワウメ  
(ツツジ科) ミヤマホツツジ、イソツツジ、キバナシャクナゲ、エゾツツジ、コヨウラクミネズオウ、エゾノツガザクラ、アオノツガザクラ、チシマツガザクラ、イワヒゲ、ハナヒリノキ (国・色)、ジムカデ、ヒメシャクナゲ、コメバツガザクラ、シラタマノキ、ウラシマツツジ、ツルコケモモ、ヒメツルコケモモ、コケモモ、クロマメノキ、エゾクロウスゴ、オオバスノキ、イワツツジ  
(ガンコウラン科) ガンコウラン  
(モクセイ科) アオダモ、ハシドイ、エゾイボタ  
(スイカズラ科) エゾニワトコ (国・色)、カンボク、ミヤマガマズミ、ムシカリ、リンネソウ、ケヨノミ、ヒロハノヨノミ、エゾヒョウタンボク (国)、チシマヒョウタンボク、ウコンウツギ、ネムロブシダマ (国)  
(イチゴツナギ科) チシマザサ、オクヤマザサ、シコタンザサ、カラフトザサ

### ○ 主な林床植物

- (シダ植物) トクサ、チシマヒゲノカズラ、スギカズラ、ヒメスギラン、ヒゲノカズラ、アスヒカズラ、ウチワマンネンズギ、コスギラン、ホソバトウゲシバ、ミヤマメシダシラネワラビ、エゾフユノハナワラビ、ミヤマワラビ、ホソイノデ  
(離弁花植物) オオバイラクサ、ムカゴトラノオ、オオヤマフスマ、シラオイハコベ、チシマトリカブト、ヒメイチゲ、チシマネコノメソウ、チシマヤマブキショウマ、オニシモツケ、ミヤマダイコンソウ、チシマゲンゲ、コダマソウ (*Oxytropis retusa*) コミヤマカタバミ、ミヤマスマレ、ミヤマタニタデ、ゴゼンタチバナ、シャク、チシマニンジン (シラネニンジン)  
(合弁花植物) ギンリョウソウ、ツマトリソウ、クルマバソウ、クルマムグラ、エゾノヨツバムグラ、ウルップソウ、チシマシオガマ、ムシトリスミレ、レンプクソウ、チシマギキョウ、イワギキョウ、タニギキョウ、ミミコウモリ、ウラゲヨブスマソウ、コハマギク、オオブキ、ハンゴンソウ  
(単子葉植物) ギョウジャニンニク、ツバメオモト、クルマユリ、チシマアマナ、マイズルソウ、オオバタケシマラン、チシマエンレイソウ、ヌカボシソウ、クモマスズメノヒエ、チシマヌカボ、イワノガリヤス、チシマガリヤス、コメススキ

ヒロハコメススキ、ミヤマクロスゲ、イワスゲ、アオチドリ、コイチョウラン、アオスズラン、ヒメヤマウズラ、フタバラン、コフタバラン、ミヤマフタバラン、ミヤケラン、ホソバノキソチドリ

(国、択、色はそれぞれ国後、択捉、色丹にのみ分布)

色丹島の植物については、戦前1934年に館脇 操博士がこの島で行った調査の報告書が出されており、これを大場達之博士よりご提供頂いたので、概要を記す。

資料：色丹島植物調査報告（館脇 操、北海道庁拓殖部刊、昭和15年）

館脇が1934年 6-7月に道庁の委嘱を受けて全島を一周調査し、宮部憲次、木村有香、大井次三郎等の協力を得て 551種の植物目録を作成した。

本島は、国後・択捉が千島火山帯の上にあるのと異なり、根室半島の延長線上にあり、地質・地形も相異して、高山はないが、高山植物の豊富さは他の島に抜きこんでいる。とくに北部海岸断崖上の草原、又古丹山、マスバ山、斜古丹山、馬の背付近が優れており、又古丹山稜ではウルップソウが、馬の背ではカタオカソウ(*Pulsatilla* の一種) が、それぞれ 2キロメートルにわたって大群落をなしているとする。

#### ○注目すべき植物（館脇博士による）

リシリシノブ（イノモトソウ科）*Cryptogramma crispa* R. Br.

グイマツ（マツ科）*Larix gmelinii* Rupr.

シコタンヤナギ（ヤナギ科）*Salix shikotanica* Kimura

シコタンジンヨウヤナギ（ヤナギ科）*Salix subreniformis* Kimura, var. *psilocarupa*

ナガバカナビキソウ（ビャクダン科）*Thesium refractum* C. A. Mey. kimura

シコタントリカブト（キンポウゲ科）*Aconitum kurilense* Takeda

カタオカソウ（キンポウゲ科）*Pulsatilla taraoi* Ohwi

アナマミミナグサ（ナデシコ科）*Cerastium boreale* Takeda, var. *herbaceo-bracteatum*

シコタンミミナグサ（ナデシコ科）*Cerastium rigidulum* Takeda Takeda

シコタンハコベ（ナデシコ科）*Stellaria ruscifolia* Willd.

シコタンキンポウゲ（キンポウゲ科）*Ranunculus acris* L. var. *austrokurilensis*

シコタンソウ（ユキノシタ科）Tatewaki

*Saxifraga cherlerioides* D. Don, var. *rebunshirensis* Hara

チシマクロクモソウ（ユキノシタ科）*Saxifraga fusca* Maxim. var. *kuriensis* Ohwi

チシマヤマブキショウマ（バラ科）*Aruncus silvester* Kost. var. *kamtschaticus* Maxim

チョウノスケソウ（バラ科）*Dryas octopetala* L. var. *asiatica* Nakai

キンロバイ（バラ科）*Potentilla fruticosa* L.

ウラジロキンバイ（バラ科）*Potentilla nivea* L.

チシマイチゴ (バラ科) *Rubus arcticus* L.  
 コダマソウ (マメ科) *Oxytropis retusa* Matsum.  
 カラフトナニワズ (ジンチョウゲ科) *Daphne kamtchatica* Maxim.  
 マルバアカバナ (アカバナ科) *Epilobium ovale* Takeda, Fl. shikotan  
 シコタンアカバナ (アカバナ科) *Epilobium shikotanense* Takeda  
 レブンサイコ (セリ科) *Bupleurum triradiatum* Adams  
 チシマイブキボウフウ (セリ科) *Seseli libanotis* Koch, var. *kurilensis* Takeda  
 トチナイソウ (サクラソウ科) *Androsace lehmanniana* Spreng.  
 (シコタン) ツルカコソウ (シソ科) *Ajuga shikotanensis* Miyabe et Tatewaki  
 ウルップソウ (ゴマノハグサ科) *Lagotis glauca* Gaertn.  
 カラフトムシトリスミレ (タヌキモ科) *Pinguicula villosa* L.  
 ベニバナヒョウタンボク (スイカズラ科) *Lonicera sachaliensis* Nakai  
 チシマキンレイカ (オミナエシ科) *Patrinia sibirica* Juss.  
 シコタンシャジン (キキョウ科) *Adenophora onoi* Tatewaki et Kimura  
 シコタンオオヨモギ (キク科) *Artemisia gigantea* Kitamura, var. *shikotanensis*  
 Tatewaki  
 シコタンヨモギ (キク科) *Artemisia laciniata* Willd. var. *glabriuscula* Ledeb.  
 (チシマ) アサギリソウ (キク科) *Artemisia schmidtiana* Maxim.  
 シコタンアザミ (キク科) *Cirsium pectinellum* A. Gray, var. *shikotanense* Miyabe et  
 フタマタタンポポ (キク科) *Crepis hokkaidoensis* Babcock Tatewaki  
 チシマウスユキソウ (キク科) *Leontopodium kurilense* Takeda  
 マメタンポポ (キク科) *Taraxacum kimuranum* Kitamura  
 シコタンタンポポ (キク科) *Taraxacum shikotanense* Kitamura  
 シコタンヨモギ (キク科) *Artemisia laciniata* Willd.  
 エゾヒメアマナ (ユリ科) *Gagea vaginata* Pascher  
 クシロチャヒキ (イネ科) *Bromus yezoensis* Ohwi  
 チシマドジョウツナギ (イネ科) *Puccinellia pumila* Hitchc.  
 シコタンザサ (タケ亜科) *Sasa depauperata* Nakai  
 アイヌザサ (タケ亜科) *Sasa diacerata* Koidza.  
 オオシコタンザサ (タケ亜科) *Sasa shikotanensis* Nakai  
 ノトロスゲ (カヤツリグサ科) *Carex kurilensis* Ohwi  
 シコタンズゲ (カヤツリグサ科) *Carex scita* Maxim. var. *scabrinervia* T. Koyama  
 ヒメオノエスゲ (カヤツリグサ科) *Carex sedakovii* C. A. Mey. Akiyama  
 マスバスゲ (カヤツリグサ科) *Carex tenuiformis* Levl. et Vnt. form. *puberula*



## ○森 林

ハイマツは生育せず、ミヤマハイビャクシンが代わって、高さ1乃至1.5メートルの群落をなしている。針葉高木はトドマツ、エゾマツで稀にオンコが混じる。広葉樹はダケカンバ、ケヤマハンノキ、ミヤマハンノキ等で、カラフトシラカンバも見られる。河川域にはナガバヤナギが多く、ほかにエゾノバッコヤナギ、ナナカマド、エゾイタヤ、ヒロハノキハダ、タラノキ、ヤマグワ、シウリなどが生育する。

森林帯は、斜古丹付近よりノトロ方面にわたる一帯で、溪谷から山腹にかけて発達し、北斜面に大木が多いと報告されている。

トドマツ林--ホロベツ川流域、アマナの沢流域、泊の沢流域、松ヶ浜付近

グイマツ林--西南部キリトオシ~コンブウス間、小島

グイマツはワタスゲ-ホロムイスゲ湿原群落にも生育し、北海道のアカエゾマツの役割を担っている。

ダケカンバ林--ノトロ山西方に群落、島一帯に散生する。谷の源頭ではダケカンバ-イワノガリヤス群落となる。

ケヤマハンノキ林--河川流域到るところに生育。山地上部ではミヤマハンノキに代る。

・ケヤマハンノキ-イワノガリヤス群落--乾燥気味の窪地等に見られる。

・ケヤマハンノキ-スゲ-クサヨシ群落--河川低部湿潤地に生ずる。

ナガバヤナギ林--河川に沿い帯状に発達している。

## ○湿 原

湿原は随所にあり、カヤツリグサ科植物が優勢である。ホロベツ、アナマ、ノトロ付近に代表的な湿原が見られる。

・ワタスゲ群落--サギスゲ、ヒメシダ、シロワレモコウ、ツルコケモモ等が混生。

・ワタスゲ-ホロムイスゲ-ミズゴケ群落--キリドウシ、コンブウス間の丘陵草原のグイマツ林に囲まれた所にある。リシリビャクシン、モウセンゴケ、ガンコウラン、エゾゴゼンタチバナ、イソツツジ、カラフトムシトリスミレ等を混生する。

## ○海 岸

・海岸砂浜--余り発達していないが、ハマニンニク、ハマハコベ、ハマオグルマ、シロヨモギ、ハマニガナ、エゾノコウボウムギ、コウボウスゲが生育。

・海岸断崖--至るところに発達。植生は一様でないが、チシママンテマ、シコタンハコベ、キリンソウ、エゾイワベンケイ、シコタンソウ、チシマキンバイ等。

・海岸草原--タカネナデシコ、センダイハギ、ハマエンドウ、エゾフウロ等。

## ○草 原

シコタンザサ群落、イワノガリヤス群落、オニシモツケ-ミミコウモリ群落がある。

## 4. 動物

南千島は海洋性の動物、水鳥と海獣の宝庫である。

四島に見られる鳥類については、藤巻裕蔵教授のご好意により、V. A. ネチャエフ氏との共著「南千島鳥類目録」、極東鳥類研究会編「極東の鳥類6—千島列島特集」から良く観察される鳥のリストを抜粋させて頂いた。

### ○北方四島で観察される鳥類

- ・アビ目： アビ、オオハム
- ・カイツブリ目： アカエリカイツブリ（国・択）
- ・ミズナギドリ目： コアホウドリ、クロアジアホウドリ、フルマカモメ、マダラシロハラミズナギドリ、ハイイロミズナドリ、ハシボソミズナギドリ、コシジロウミツバメ（色・歯）、ハイイロウミツバメ
- ・ペリカン目： ウミウ、ヒメウ（四）、チシマウガラス（四）
- ・カモ目： オオハクチョウ、マガモ（四）、コガモ（三）、ヨシガモ（国・択）、オナガガモ、スズガモ、シノリガモ（択）、コオリガモ、ホオジロガモ、クロガモ、ビロードキンクロ、ウミアイサ、カワアイサ、
- ・タカ目： トビ、オジロワシ（三）、オオワシ
- ・チドリ目： メダイチドリ、キョウジョシギ、タカブシギ、ツルシギ、キアシシギ、イソシギ（三）、ソリハシシギ、アカエリヒレアシシギ、トウネン、ヒバリシギ、ハマシギ、タシギ、オオジシギ（四）、ヤマシギ（国・択）、オオソリハシシギ
- ・カモメ亜目： トウゾクカモメ、クロトウゾクカモメ、ユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ（四）、ワシカモメ、シロカモメ、カモメ、ミツユビカモメ、ウミネコ（国・色・歯）
- ・ウミスズメ亜目： ウミガラス（四）、ハシブトウミガラス（四）、ウミバト、チシマウミバト（歯）、ケイマフリ（四）、ウミスズメ（四）、エトロフウミスズメ、シラヒゲウミスズメ、コウミスズメ、ウミオウム、ウトウ（四）、ツノメドリ、エトピリカ（四）
- ・ハト目： キジバト（三）
- ・カッコウ目： カッコウ（四）、ツツドリ（三）
- ・アマツバメ目： キタアマツバメ（三）
- ・キツツキ目： エゾアカゲラ（三）、エゾコゲラ（三）
- ・スズメ目： ショウドウツバメ、イワツバメ（四）、カラフトチュウヒバリ（四）、オオヒバリ、ビンズイ（三）、タヒバリ、キセキレイ（三）、ハクセキレイ（四）、

(スズメ目) ムクドリ、ホシガラス (三)、ハシブトガラス (三)、ハシボソガラス (四)、キレンジャク、ミソサザイ (三)、カラフトウグイス (三)、シマセンニュウ (四)、エゾセンニュウ (国・択)、マキノセンニュウ (四)、コヨシキリ (国・歯)、コメボソムシクイ (択・色)、メボソムシクイ、キクイタダキ (三)、キビタキ (国・色)、コサメビタキ (三)、ノビタキ (三)、ノゴマ (四)、コマドリ (国・択)、ルリビタキ (国・択)、アカハラ (国・択)、ツグミ、エナガ (三)、ハシブトガラ (三)、ヒガラ (三)、シジュウカラ (三)、ヤマガラ (三)、シロハラゴジュウガラ (三)、キタキバシリ (三)、スズメ (三)、アトリ、コカラワヒワ (四)、オオカラワヒワ、ベニヒワ、ハギマシコ、ベニマシコ (四)、ウソ (三)、クロジ (国・択)、ホオジロ (国)、オオジュリン (四)、カンラダカ (三)、アオジ (三)、シマアオジ (国)

上記リストには四島で普通乃至は多数観察される鳥類 (渡り時期、漂行時期、留鳥を含む) を掲載した。( )内は、繁殖地を表示 (四=四島で繁殖、三=色丹・国後・択捉、色=色丹、歯=歯舞、国=国後、択=択捉で繁殖)

北方四島の鳥類は 280種が記録されており、日本本土、とくに北海道本島で見られるものとおおむね同じであるが、ウミスズメ科の鳥が豊富で生息数も多いのが第一の特徴であろう。とくに本土では絶滅危惧種に指定され、数十羽しか観察されないエトピリカなどは四島で万を越える数が生息すると見られる。同じく危惧種のウミガラスやハシブトウミガラスも多く繁殖し、本土ではめったに見られないツノメドリ、ウミバト、シラヒゲウミスズメ、ウミオウムなども普通に観察される。

ほかにも、危惧種のチシマウガラスは四島で普通に繁殖しており、ワシタカ科ではオジロワシ、オオワシ以外にも、オオタカ、イヌワシ、ノスリなども観察されている。フクロウ科はリストにはないが、稀少種のシマフクロウやシロフクロウ、キンメフクロウなどが少数ながら生息する。キツツキ科ではエゾアカゲラ、コゲラのほか数は少ないが、アリスイ、クマゲラ、エゾオオアカゲラも繁殖が確認されている。

千島列島は北方へ、また北方から南国へ渡る鳥類の重要なルートであり、南千島はその架け橋のいわば南詰めの位置に当たる。渡り鳥が羽を安め、次の渡りに備える重要な地点である。また北洋に突き出した最北の森林でもある。これら鳥類の保護のためには、南千島の森林と古木の保全、沿岸魚類の乱獲をせひとも防止しなければなるまい。

陸上動物については資料に乏しいが、ヒグマは国後・択捉両島に住み、色丹島にはいない。その他の哺乳類としてはキタキツネ、クロテン、エゾリス、エゾウサギ、エゾアカネズミなどが挙げられるが、詳細はデータを入手していない。

海獣（鯨脚類）については、ラッコ、ゴマフアザラシ、ゼニガタアザラシ、トドが多数生息し、外にもオットセイ、クラカケアザラシ、アゴヒゲアザラシ、フィリアアザラシも見られる。

四島に分布する主要な海獣の数は次のとおりである。

	ラッコ	ゴマフアザラシ	ゼニガタアザラシ	トド
択捉島	1,052	700	503	224
国後島	-	1,418	137	1
色丹島	-	50	549	-
歯舞諸島	-	2,871	1,390	282
計	1,052	5,039	2,579	507

・1991年 ロシア側による調査（和田一雄博士. 鯨脚類の保護区論. 1995年による）

海獣達は、常に人間によって迫害され、追い詰められ続けて来た。一つには毛皮の採取のために、そしてもう一つには漁業の妨害者として。しかし北洋は海獣達の住処として、人間が活動する前から魚を食物として生きて来たのである。これ以上彼らを迫害すれば、種の存続が危ぶまれる段階に来ているいま、彼らの安住の地であった北方四島から彼らを締め出すような「活動」だけはして欲しくないのである。

イルカ・クジラ類、魚類についても現在入手出来た資料がない。戦前の漁業の対象となっていたものは、サケ・マス、ニシン、タラ、オヒョウ、タラバガニ、ハナサキガニ、ナマコ、ホタテガイ、ホッキガイそれにクジラが挙げられているが、正確な種のリストは未入手である。

## 5. まとめ－自然保護

手持ちの資料で北方四島の自然を概観した。そこには原生林と、人を寄せつけない火山群や、人手の加わっていない海岸線・河川・湖沼など、すでに日本本土では見ることが出来なくなった原生自然の状態、生態系が遺っている。これは20世紀の奇跡とでも言ってよいのではないか。もし環境保全をないがしろにしたまま開発が行われるならば、この貴重な自然は瞬く間に失われてしまうだろう。

「共同経済開発」が従来のやり方で進むとすれば、具体的に発生するであろう問題は、次のように考えられる。

水産資源の乱獲により、鮭鱒、タラ、ホッキ、カニ等の枯渇をもたらし、海鳥・ワシタカ類・海獣はエサの減少のため生息数を激減させるだろう。コンブ漁についても同様である。また魚網にかかるアザラシの数も無視できない。さらに河川を遡行するサケの減少はフクロウなどの猛禽類やヒグマの生息も脅かすことになる。

森林の伐採は明らかに森林動物とくに鳥類のフクロウやキツツキなどの稀少種に大きなインパクトをもたらす。林道の開発と伐採は生息動物のハビタットを分断する。

鉱物資源の探鉱は、山地や溪谷の破壊を招きかねない。

インフラ整備は、森林・原野の貴重な植生の破壊や海岸地形の改変を伴う道路整備や、湿原の埋め立てによる土地の造成、河川の改修やダム建設による改変、それに工事に伴う環境汚染も考えられる。

観光開発では、無統制な開発－宿泊設備・飲食店・土産物店・の乱立、観光道路、橋梁、港湾施設、海岸線の改変などの大規模土木工事などが懸念され、その後にはマス・ツーリズムや車公害の発生が追い打ちをかけることになりかねない。

さらに、希少な植物・動物を狙った盗掘や密猟も発生するかもしれない。

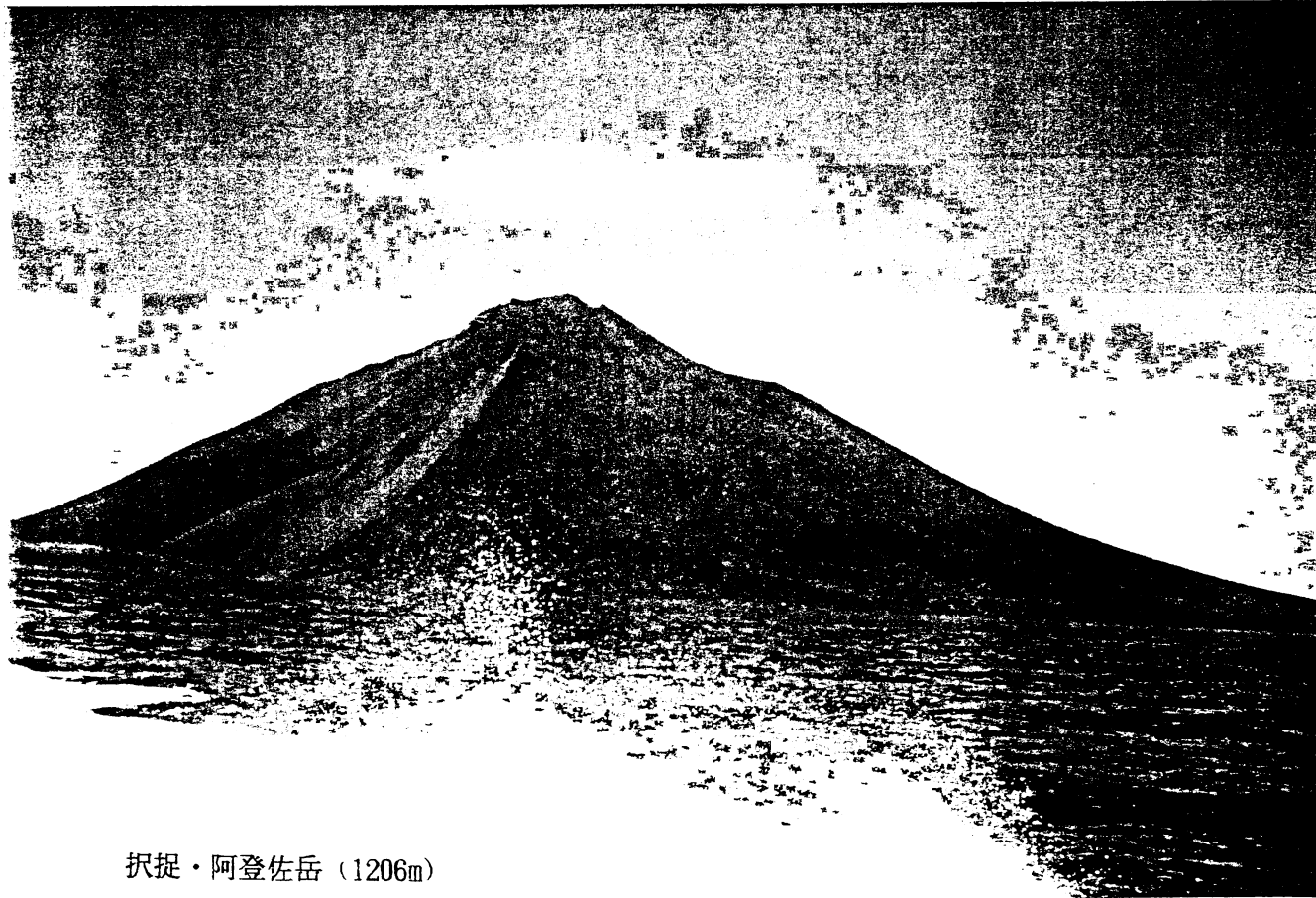
このような、過去の日本が歩んだ過ちを再び繰り返さないためには、経済活動の前にまず環境・自然保護の基本政策を確立することが肝要である。そして何が、何処が貴重かを日露共同で調査し、世界的な基準により評価を行なう。すでにロシアで指定した保護区域を含め、最重要な地域は（沿岸を含めて）、原生自然環境地域として厳重に立ち入り制限を行い、これに準ずる地域は立ち入り規制とともに統制されたエコツーリズムによる観光の対象とする。そしてその他を居住・産業開発地域として共同経済活動を行わしめる。その場合も人口を制限し、島民・旧島民の居住・雇用を優先して環境負荷を極力少なくした産業開発を行うべきである。またこれらの統制には特別立法が必要となろう。

北方四島の「共同経済活動」の前に、いわば「共同環境保全活動」を先行せしめるべきであり、開発は環境保全を優先的に考慮した、新しい「21世紀型の開発」が望まれるのである。

(了)



択捉・紗那のグイマツ林と散布山（1587m）



択捉・阿登佐岳（1206m）



色丹・松ヶ浜湾とグイマツ



手つかずの溪畔林



歯舞・カナクソ岩のトド



チシマウスユキソウ



コダマソウとウルップソウ

(写真提供：近藤憲久)



